

通過儀礼と社会構造

山 田 洋 子

私達が、生活していく上で、あたりまえのこととして特に意味を考えないで行なっていることは、意外と多いものである。そういったあたりまえの行為の中から私は通過儀礼を選び出し考えて見ようと思ったのである。

本稿の目的は、通過儀礼の変遷を、社会構造上の戦前・戦後の変化との対応のもとで考察することによって、現在の通過儀礼は、その本質から見ると、かつての在り方とは、全く異なった在り方で存在していることを明らかにすることである。

儀礼は、神の力を得たいと思う時に必要なものである。人間の力には、限度があるために、人がよりよく生きるためには、神の力を必要としたのである。神の力を得るために、ムラ人達が祈願するのである。ムラ人達が祈願する場合の多くは、共同の利害のためのものが多く

祈願も共同で行なわれた。

元来、ムラは群であり、一族（一氏）の血縁集団であった。そして、その一族の神として氏神というものがあつたのである。その血縁集団が、他の一族等を含むようになり、地縁をも含んだ集団として拡大していったのである。それが、ムラであり、ムラの神としての氏神が確立していったのである。

共同祈願は、ムラ人達が同一の又は、共通の利害関心を持つているからこそ成立するのである。例えば、日照り続きの時に、豊作を願う農民達（ムラ人達）が、共同で雨乞いを行なうこと等である。又、ムラ人が生活していく上での共通の利害関心は、共同祈願だけではない。水稲耕作であつたために、水を必要とし、そのために川から水を引き入れたりすること、肥料にするための草の

刈り取り、道普請、橋の建て替え、災害時等、ムラ人達にとつて共通性、共同性のあるものは、共同作業がなされたのである。又、屋根葺き、田植え等も一族のみでは、時間を要するために、共同協力作業を必要としたのである。このような、共同作業は、ムラにとつては、不可欠なものなのである。ムラ人達は、そういった共同作業を行なうことによって、結束力を強めていくのである。つまり、共通性、同一性等といったものが、同一の世界観を作り上げ、統一性を生み出すのである。同一の世界観とは、同じ自然条件、環境のもとで、同じ仕事をし、それらによつて、共通の問題点を生み、共通の話題を持つようになる。それがお互いを理解し合うということになり、又、年数を重ねていくことによって、人と人、家と家との絆が強化され、同一の考え方を生み出すのである。ムラ人は、ムラの守護神である氏神を統一的シンボルとして扱うようになっていったのである。

このような、血縁、地縁関係、共同作業、集合表象としての氏神が存在した、農村を基盤とした社会、つまり、村落共同体が戦前の社会なのである。又、明治以後

行政の組み入れによつて、行政的に国民を統一していく必要が生じたために、天皇を集合表象として扱うようになっていった。戦前の社会構造は、氏神と天皇という二重の集合表象が存在する形で存在していたのである。

ムラには、掟というものがあり、ムラ人は、その掟を守っていれば、ムラの秩序は、保たれるのである。もし掟を守らなかつた者、例えば、共同作業に理由なく参加しなかつた場合や、ムラの恥を外部に漏らした場合等には、ムラ八分等の制裁が加えられた。

ムラの中で生活していくためには、ムラ人からの承認が必要なのである。ムラ人以外の者が、ムラで生活しようと思つてもムラ人から承認されなければならない。又ムラ人が家の新增改築、井戸掘り等を行なおうとしても本家、地主、隣り近所の承認・承諾を得なければならないのである。人間が成長していく過程においても承認を受ける必要があり、それが、人の一生の節目、つまり通過儀礼を行なう時なのである。

人の一生の節目は、誕生、成年、結婚、死亡の四つに分類できる。誕生は、母親にとっては、出産であり、ム

ラにとつては、ムラ人の増加である。出産は、産小屋⁽¹⁾という所で行ない、出産後一ヶ月間は、ここで生活した。そして、宮参りを行なう。氏神に参り、氏子入りをし、健康に育つように祈願するものである。氏子入りということは、ムラの一員として承認されたということである。子供に名前を付けることも重要なことである。子供の名前を親だけで名付けるのではなく、産婆、長老、本家等に名付け親になってもらうのである。これも、多くの人に承認してもらうために行なうのである。子供が成長していく過程で、何回か、共同飲食が行なわれるが、これもムラ人から承認してもらうために、地縁、血縁の者達を招いて、食事するのである。子供が、子供として承認されるのが、関東地方で言う七五三である。子供が成長して、成年式をむかえる。男性の場合、農作業等の共同作業が一人前にできるころ、年齢にして十五歳ごろにあたり、村祭り等にも参加でき、結婚してもよい資格が与えられたのであった。結婚は、男性の場合は、一人前の大人として、ムラ人として扱われたが、女性の場合は、嫁としては、扱われたものの、ムラ人として承認さ

れるには、時間を要したのである。当時は、男子中心主義であり、女子は、労働力提供者、子供を生む道具でしかなかったのである。それは、主婦として、嫁が権力を持てば、その家は崩れ、家制度の崩壊となり、それが、家父長制の崩壊につながり、しいては、天皇制の崩壊につながるからである。結婚式は、先祖代々の前(神棚等の前)で行なわれ、御先祖様にも承認してもらうのである。披露宴は、一つの共同飲食であり、地縁、血縁の者達を招いて行ない、社会的に承認してもらうのであった。葬式の際は、ムラ八分になっていた者でも、近隣の者達が手伝い、相互扶助という共同体の力を見せたのである。このように、ムラの中で生活していくためには、社会的承認を必要とし、承認を受けた者がムラに定着し永住できたのである。ムラ人からの承認は、氏神からの承認でもある。

戦後の社会構造と通過儀礼について見ていくことにしよう。我が国は、第二次世界大戦に敗けたことよつて天皇制が崩壊し、天皇絶対主義から、民主主義へと変化した。又、第一次産業から、第二次産業へと産業構造も

変化した。この二つが変化したことによって、種々の方面に変化をもたらしたのである。家制度の廃止、農地改革等によって民主化が進んでいく、そういつた中で、日本は不況をむかえたのである。だが、朝鮮戦争によって特需景気をむかえた。これにより、工業人口は増加していった。工業が発展すれば、機械化が進みベルトコンベアシステムによって分業がなされ、大量に生産される。一方では、機械化の発展にともない、テレビ等も普及し始め、大量に生産された物が、それらのマスメディアを通して宣伝され、大量に消費されていくのである。工業人口増加により、兼業農家が増加し、工業労働者と農業労働者の賃金格差がなくなり、農村の生活様式も画一化されていったのである。私達は、マスメディアを通して情報を得て、それによって動かされているのである。情報が流行を生み出し、その流行に振り回されているのが、現代人なのである。流行に合うことが個性であると思っている人が多い。しかし、それは、逆に支配されているということであり、そのことに気付かないのである。

都市は、各地方から人口が集中しているためにまとまりのない社会を作り上げている。工業が発展し機械化がなされ、農作業の面においても、農耕用機械の出現によって、共同作業を必要としなくなった。家族制度の廃止、農業構造改善事業等によって共同体が崩壊した。又、天皇制の廃止とともに、氏神信仰というものが崩れ、集合表象としての氏神は、機能を果さなくなったのである。従来の通過儀礼は、本来の意味を失い、伝統的文化として後世に正当化されていくのである。

現在の都市においては、地縁性がなくなったために、従来の通過儀礼を行なう必要性はないのであるが、今まで行なってきた通過儀礼をそう簡単に無視することもできず、形のみが正当化され、沈黙化していくのである。宮参り、七五三等、氏子入りして社会的に承認されるものであったのが、人が行なうから、自分もという形で一つの流行を生み出していったのである。結婚式も、家で行なうことはなく、ホテル等を利用して行なう傾向が強まっている。これは、相互扶助がなくなったこと、家が狭い等の都市化現象の出現のためであろう。披露宴等の

共同飲食においても、地縁関係者を招くことは、ほとんど見られないのである。都市においては、地縁関係者から承認される必要はないのである。むしろ、職場の人達からの承認を必要としている。このような、地縁社会からの承認を必要としないものを、通過儀礼と呼ぶことはできないであろう。現代社会には、その社会に適合した通過儀礼が存在しているはずである。

我が国は、敗戦後、工業国として立ち直っていった。そして、高度経済成長とともに、産業国日本を築き上げたのである。資本主義国である以上、企業の発展拡大は、国の発展につながる。企業が発展拡大していくためには、消費面と生産面の両面について考えねばならない。消費面においては、先に述べたように、大量生産、大量消費することによって作り出された流行を生み出し国民、つまり消費者を支配していくことである。生産面においては、企業にとって役立つ人材を選ぶことである。企業が大学等の高等教育を受けた者を必要としている。言い換えれば、能力のある者を必要としているのである。明治維新によって、士農工商という世襲的身分制

度が廃止され、四民平等になり、誰でもが高等教育を受けられるようになり、立身出世することができた。又、敗戦によって、民主化教育がなされ、高度経済成長とともに、進学率も延び、今日では、高等学校も義務教育化しつつある。このように、高等教育を受けて、立身出世することが、人生の一つの目的ともなっているのである。それにも増して、高等教育を受けた能力のある者が企業が必要としたのである。そして、そういった者に対して、社会が特別な扱いをするのである。昭和四十一年に「期待される人間像」というものが、中央教育審議会によって打ち出されている。これは、企業に都合のよい人間を作りあげていくこと、つまり、エリート育成を目的とした教育方針なのである。企業は、平社員、係長、課長、部長、取締役、社長といった縦の系列がはっきりしている組織である。大学等を卒業している者は、それだけ早く他の者よりも重要なポストに付くことができるのである。

産業構造の変化によって、共同体が崩壊したために、氏神という集合表象は、無力となったのである。そして

それに変わる集合表象として、企業組織というものが生まれたのである。私達は、必ず複数の集団に属している。家庭に始まって、国、そして世界という集団があり、その集団の間のいくつかの集団に属することによって、社会が成り立っているのである。『組織の中の人間』

の中に、「われわれすべてにとつて、安らぎと確かさの感情は、常に集団の一員としての資格が保証されているところに由来する。」とある。企業組織に属することによって生きる支えを見出すのである。⁽²⁾例えば、何の仕事をしていいますか、という質問に、大多数の人々が職種ではなく企業名を名乗るのは、企業組織に属している証拠でもある。都市では、まとものない社会となっているために、都市で生活している人々は、上からの圧力によっての秩序づけを必要としている。上からの圧力とは、行政的なもの、企業等の力である。これが、企業組織が集合表象であるという所以でもある。

私は、通過儀礼というものを考えていく中で、次のことに気付いたのである。敗戦後、民主主義になり、民主化の現象が見えてきたと思っていた。しかし、それは、

表面的なことであつて、内面的には、国家から支配されていて、主権も在民ではなく、在国なのであるということに気付いたのである。もし主権在民ならば、集合表象というものは、民衆側にあるべきで、国側にあるものではないのである。

このような社会の中で、私達が生きていくためには、社会に適合した人間となることである。社会に適合した人間とは、企業が発展拡大していくための二つの要素、つまり、大量生産、大量消費という作り出された流行に振り回され、又、(一流) 大学を出て、(一流) 企業に入つてエリートとして立身出世することである。小学校、中学校、高等学校、大学の六三三四制という学校制度を終了することによって、社会から承認され、企業に入つて、エリートとなっていくこと、つまり、立身出世することが、社会的承認を受けることであり、これこそが現代社会の通過儀礼の在り方なのである。

(注)

(1) 産小屋は、馬屋の北奥にあり、産婦はここで出産する。人間の住む俗世界には穢れがあり、神はこれを嫌う

た。だが産神はこれを嫌わずに産婦と赤子を守ったのである。他の神から隔離するために産小屋で出産するといふ説と、誕生は、魂の再生であるから、聖なるもの（穢れ等がない）であるために俗なる世界から隔離するといふ説の二つの考え方があつた。

(2) いつの時代においても、集団に属していなければ生きえないのである。何故ならば、共同体も集団であつたためである。

(参考文献)

宮田登「神の民俗史」岩波新書、一九七九年

きだみのる「につばん部落」岩波新書、一九六七年

堀越久甫「村の中で村を考える」NHKブックス一九七八年

牧田茂「人生の歴史」河出書房新社、一九七六年

「大間知篤三著作集」第三巻、未來社、一九七六年

井之口章次編「人生儀礼」有精堂、一九七八年

P・L・バーガー、T・ルックマン「日常世界の構成」新曜

社、一九七七年

W・H・ホワイ特「組織の中の人間」東京創元社、一九五九

年（六十頁のみ）

姉私立大学通信教育協会編（山下淳志郎他）「倫理学」姉私立大学通信協会、一九七八年

（やまだ ようこ、本学四年次生）